コレヨリ、キカンノエンゴヲオコナウ。

比較的どこにでも湧くボンドルド

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一般パイロットの村上春野は、敵戦闘機との戦闘による疲れからか、不幸にも白塗りの光に追突してしまう。全ての責任を負った村上に対し、光の主ｇ４ｈｓｙｃ々３やｂ＃ｊ＠のｖ：ｒ「ｕｄの行った施しは・・・

目　次

1章。幼き青人魚の卵との出会い
1話 ―― 1
第2話 ―― 5
約束と贈り物 ―― 8
歪みをなんとかしよう ―― 10

1章。幼き青人魚の卵との出会い

1話

「ふう……死んだな」

辺りに見えるのは、どこまでも広がる大海原。辺りに見えるのは蒼一色

太陽の反射を受け輝く波間の上を駆け抜ける。

だがその海の上を翔ける俺の零戦は燃料タンクから火を吹き出しているという有様だ。つい数時間前までピカピカとまでは行かなくても、どこか無骨な格好良さのあったモノとは思えない変わりようだな。

風防は敵の機関銃でボロボロな上、俺自身も数発被弾しており、どろりとどす黒い血が流れ出てる。

落下傘は弾丸によって穴まみれ、もはやここまでだろうと自らの人生を回顧する。

基地でゴキブリを食って死にかけた事、訓練中にこっそり甘味を食べたのがバレて上官に鉄拳制裁を喰らったこと、同じ釜の飯を食った仲間が目の前で撃墜された事、そして

俺はただ、この空を自由に飛びたくて戦闘機乗りになったこと。

初めて飛行機に乗った時のことはよく覚えてる。その時乗ったのは訓練用のものではあったが、普通に生きていたら一生縁がないかもしれない体験に胸を踊らせていた。

エンジンが唸り声をあげ、その際の振動が身体中に電流のように伝わっていき、感動に打ち震えた。これが飛行機か…ってな

そしていよいよ離陸の時、操縦桿をしっかりと握り、スロットルレバーを倒していく。音として聞こえる、空気を切り裂いて加速していく力強さ。

先程までしっかりと認識できていた木々の葉が、もはや緑色のなにかにしか見えない速さまで到達した時、俺は鳥になった。

「もっと…飛びたかったなぁ」

俺の視界は、白に染まった。

「村上さん！起きてるかい！また洗濯機が壊れちまったんだ」
窓から見える太陽は既に高く登り、寝過ごしてしまったのだとひと目で分かる。
怒り気味の三浦さんの声を伴奏曲にしつつ、やはり畳はいいな、と呑気に考えてしまっていた自分に喝をいれ起き上がった。
「すまんな三浦さん、すぐに直しに行くよ」
「あいよ。たく、せっかくツラはいい男なのに生活はだらしないったらありゃしない」
「はは、耳が痛いな」
あの日、俺は九死に一生を得た。
その時の俺は、目を開けないほどの眩い光に包まれた際、『ここが靖国か』と納得して身を任せようとした。
だがいつまで経っても体の感触は残ってるし零戦のエンジン音と吹き出してる火の音はあがり続けてる。不思議に思った俺は痛む体に鞭を打ち外を見ると。
『山!?陸地まで来たというのか、あの一瞬で!?』
俺の故郷のド田舎を思い出す雄大な山々が広がっていた。
当然有り得ない事だ。俺がいたのは海のど真ん中、1番近い島でも5ｋｍはあったはずなのに、だ。
『ぐっ！ともかくもうコイツが持たないから着陸をっ！』
結局山の中にあった廃神社に続く広く長い階段で無理やり着陸したのだった。幸いな事に右翼から出た火は着陸寸前には鎮火していた、燃料切れが幸いしたようだった。
ただ着陸したからといって、怪我が治った訳では無いので、依然血の流れる、重い体を引き摺りながら階段の下に見える小さな村目掛けて懸命に歩き出した。

結局着いたのは意識が飛ぶ寸前のギリギリだった。その際真っ先にたどり着いた民家の人によって介抱されたのだが

『ず、ずびません、だずけてほしいのですが』

『ぎゃぁぁ!?!?おばけだぁぁあ!!!』

本当に三浦さん一家には申し訳ないことをしたと、今でも思っている。

そりゃびっくりするよな、いきなり庭先に血まみれの大男が来たら。

『え!?人!?あ、倒れたぞ!おい!医者のじいさん呼べ!』

『あわあわあわあわ、取り敢えず止血!?』

『馬鹿!それは牛乳を拭いた雑巾だ!包帯はこっち!』

俺は最終的に、村唯一の医者であるじいさんの手によって一命を取り留めた。

これが始まり。で、今は

「あ、なんか石ころが挟まってる、これのせいだよ三浦さん」

「こりゃ・・・ アイツか!あのガキまたこんなイタズラして!」

「ははは!相変わらずの悪ガキだな」

「まったくこれで4度目だよ・・・ 帰ってきたら拳骨だな」

ご覧の通り村で唯一の電気屋さん（知識は独学）をやっている。

まあ電気屋といってもやってることは唯のなんでも屋なんだよな、犬の散歩から草むしりに田んぼの手伝いまで、頼まれれば基本なんでもやる。

なにせ村の人達は恩人だからな、見ず知らずの人である俺の命を助けてくれただけでなく、神社の管理とセットではあるが境内にある社務所に住まわせてくれている。大事な土地の1部を俺に渡して「畑やってみ!」と勧めてくれたりもした。お陰で美味しい野菜が大量に採れる。

といった具合にこの村に順応していた。のだが、ある日俺は気づいてしまったのだ。

『ここは飛行機が存在しない異世界である』

ということに。
ちなみに俺のしる時間軸から何十年も後の未来に居ることは最初から分かっていた。診療所で目を覚ましてじいさんと話すうちにそれにはすぐ気づけた。「まあ生きてれば摩訶不思議なことの1つや2つあるだろう」と自分を納得させた。
だがここからがおかしいのだ。
この世界では、今から100年近く前に地盤沈下で日本の国土がとても小さくなった為、海洋技術が著しく発達し、その結果ブルーマーメイドとかいう原則女性しか居ない海上組織が生まれるなんてこともあったようだ。あとホワイトドルフィンなる組織もあった、こちらは男性のみらしい。
さしもの俺もこれには困惑した。ここは時間軸云々の前にそもそも俺の知る地球ではない可能性が高かったから……　というかホントに異世界だったのだが
まあ帰ろうにも方法なんて分からないし、帰ったとしてもどうせ家族も居ないのならここで骨を埋めるのも悪くないなと思った。
「村上さん、ちょっと草むしり手伝ってくれんか？」
「わかった、今行くよ」
空を飛べないのは少し不満だが、幸せな生活だな

第2話

ふと俺は考えた。
『もし俺が空を飛べる兵器を持っているのが行政にバレたらどうなる？』
答えは馬鹿でも分かる。取り敢えずひっ捕らえて情報吐かせて邪魔なら消す、が妥当だろうな。俺ならそうする。
だから俺は、この村に来てすぐの頃は焦った。それはもう焦った。
『もし村の誰かがこの事を広めたら』と1人で深刻な表情をしてたせいで悪ガキどもからは鬼みたいな顔した変人、と恐れられていた。
まあその心配は杞憂に終わるのだが。
ウジウジしてないで何とかしないと、そう思い切って三浦さんに俺はこう切り出した。
『あの、あの緑色の奴のこと、この村の外の誰にも話さないで貰えませんか！』
『お、いいよ』
『その為ならなんでも・・・　え？いいんですか？』
『おん、見られたくないんだろ？ならいいよ』
『三浦さん・・・　いや、姉貴！』
懐かしいな・・・　あの後姉貴呼びは止めろと怒られたことも含めて。
少なくとも現在のところはなんの問題もなく暮らしている。いや、いたのだが・・・

「すごいすごい!!新型のスキッパーだ！」
「あ、うん、ソウダゾ、コレハシンガタノスキッパーダゾ」
この子は岬明乃、最近三浦さん家の近くに住む岬さん夫婦に引き取られた女の子だ。
海難事故で両親を無くしているらしく、それを哀れに思ったのと、そしてなにより笑顔の可愛さに脳を焼かれた2人によって家に迎え

入れられたのだ。天真爛漫で好奇心旺盛な彼女は直ぐにここに順応した。
俺たちもそれを微笑ましく見守っていた
そして現在。
かなりまずい状況だ・・・ 悪ガキ衆は保護者よ鉄拳制ｓ・・・ 愛ゆえの厳しさによってなんと情報の漏洩を防いでいるが、この子の親はそんなことしない人達だし、こんな純粋で可愛い子供にそんなこと誰も出来ないだろう。
なんか眩しいよ、純粋パワーがすごいよこの子は。
・・・・ だかやはり、子供の口は緩い・・・ ！ここは俺の主武装たる鬼神と言われた恐ろしい顔でお願いをすれば・・・ !!!
「ねえねぇ！乗ってもいい？」
「ア、ウン、ノルダケナライイヨー」
「やった！」
できんわ!!そんなことできんわ!!!笑顔が眩しくて直視できない！
こんな笑顔を曇らせるなんて俺はできない！チクショウ！
・・・・ いや待てよ？今明乃ちゃんは零戦をただのスキッパー（この世界においてはメジャーな水上バイク）だと誤認している。このまま誤魔化せばなんとかなるのでは・・・・ ？、あれ、となるとわざわざ悪ガキ衆が拳骨される必要もなかったんじゃ・・・・
ま、まあ今は目の前のことに集中だ。
「は、ははは、新型は凄いだろ明乃ちゃん」
「うん！・・・・ でもこれって鳥さんに似てるね！もしかしたら飛んじゃったりして！」
「ぬぐぅ!?!?」
「？、春野お兄さんどうしたの？」
「いや、なんでもないぞ明乃ちゃん」
洞察力どうなってんだこの子は！1発で正体見抜いてるよ！
「き、今日はもう遅いから帰りなさい、岬さん達も心配してるだろうからね」
「はーい、またね！春野お兄さん！」

……　整備はもっと山奥でやろうかな

約束と贈り物

俺がこの世界に飛ばされてから早2年程が経った。
現在は村の中でなんでも屋のような立ち位置を維持することに成功している。
航空機が無いこの世界においてはいわゆるオーバーテクノロジーに当たる俺の零戦は神社の裏手にある山の奥深くに隠してある。敵との交戦による損壊部分の修理自体は既に終わっているので燃料さえ入れればいつでも飛べる・・・ はずだ。

「どう?中学の制服」
「おー、可愛いな。」
「えー、春野お兄さん反応薄い〜」
俺の返答に不満を零すこの女の子は岬明乃ちゃん、数ヶ月前に危うく（というかドンピシャで）零戦の正体を当てて来た洞察力の鬼だ。
そんな鬼の明乃ちゃんも来週から中学生、まだ新品特有の固さの残る制服に身を包み、中学生活への期待で満ちた顔をしている。
「これでまた1歩夢に近づいたね」
「あぁ、明乃ちゃんはブルマーになりたいんだっけか。凄いねぇその歳で明確な目標があるのは」
「うん、モカちゃんと一緒にすごいブルマーになるんだ!」
「そうか、頑張ってな」
明乃ちゃんは海難事故で元のご両親を亡くしている、それ故に強くブルーマーメイドになる事を願っているのかもしれない。
これはつい最近知ったことだが、明乃ちゃんの話によく出てくるモカちゃんは同じ児童養護施設で暮らしていた女の子のようで、互いに立派なブルーマーメイドになろうと誓ったのだと語ってくれた。
「あ、そうだそうだ。明乃ちゃんに入学祝いを贈ろうと思っていたんだよ」
「入学祝い?」
「そうそう、こっちおいで」

明乃ちゃんの手首に手編みのミサンガを装着する。ホントはもっと豪華な物をあげたかったんだが、金も無いし、三浦さんに気持ちが篭っていればよしと助言も頂いたので丹精込めて作らせてもらった。
「わあ、かわいい！これ春野お兄さんが作ったの？」
「おう、こういうのはやったこと無かったから苦戦したけどな。村のばあ様達に教えて貰いながらやってみたんだ」
「ありがとう！すっごい嬉しいよ！」
どうやらお気に召した様子で一安心。
・・・ 俺もそろそろ定職に付かないと不味いかな？なんでも屋は恩返しでやってるから金銭は要求しないと決めてるし、いつか来るかもしれない有事の為に燃料も買っておきたいし・・・。
「あ！春野お兄さんのスキッパーってまだ乗っちゃダメかな？」
「あー、まだダメかな」
「えー、まだダメ～？」
「ダメ・・・・ だけど、そうだなぁ、もし明乃ちゃんの一人前のブルーマーメイドになれたら乗せてあげてもいいかな」
うっ、キラキラとした目が目に見えて落ち込むのを見てつい甘やかしてしまった・・・ 本当に立派なブルーマーメイドになったらどうしよう・・・？
無理やり零戦にフロートを付けて二式水戦みたくすれば誤魔化せるか？
・・・ いやいやフロートなんて用意出来るかも分からないし、流石にそこまでの改造はおれの技術ではできない
「ホントに？」
「もちろん、あ、あとスキッパーの免許も取ったらね」
「うん！約束ね！」
「あぁ、約束だ。」

本格的に対策をしないとヤバいかもなぁ・・・・

歪みをなんとかしよう

この子の才能の片鱗を見た気がする。
明乃ちゃんが中学校に入学して既に3ヶ月程経過し、まだ涼しかった春から夏に切り替わりつつあり、暑さも本格的なものとなって来ていた。
そんな初夏のある日、いつも通り神社に遊びに来た明乃ちゃんの報告が
俺をたまげさせた。
「春野お兄さん！小型スキッパーの運転免許とれたよ！」
「早っ!?」
そう、小型のスキッパーの免許を取得したのだった。いや・・・ 早くないか？まだ12歳だよこの子
「す、すごいな。もう小型スキッパーの免許か」
「えへへ、あ、でも中型の免許は小型スキッパーの経験が1年以上無いと取れないだって」
「そうか・・・ 頑張れ」
いくら海洋国家と化した日本では比較的メジャーな乗り物だとは言っても12歳で取れるものなのか？
「1年かぁ、早く取りたいなぁ」
「明乃ちゃんなら普通に乗りこなせそうだけどな、まあ流石に法には逆らっちゃダメだからね、しかたないよ」
「はーい」
少しの間、静かな時間が流れた。照りつける太陽の光と熱を受けた頬に汗が数滴伝う。飲み物でも持ってこようかな
「春野お兄さん・・・」
「ん？どうかしたか？」
「あ、いや、なんでもないよ」
と、立ち上がった所で明乃ちゃんに呼び止められた。かと思えば気まずそうな面立ちで慌ててなんでもないと言う
・・・・・・ 明乃ちゃんは幼くして血の繋がった両親を亡くし、その後

１２歳になるまでは児童養護施設で育った。恐らくそこでは誰にも頼れない環境だったのだろう、１人で考え、１人で決断し実行する。
それ故にかこの子は全部１人で何とかしようとする癖がある。
明乃ちゃんを引き取った夫妻のお陰で多少はマシになったみたいだが、やはりまだ完全には心を開いてないみたいだな。
このままではいずれパンクするぞ・・・
「なぁ明乃ちゃん」
「うん？なに？」
「今のご両親、岬さん達とはどうだ？」
「あ、うん！２人ともとっても優しくて、毎日楽しいよ！」
嘘では無いな・・・ でもちょっと表情が曇ったのは見逃さないぞ
「なあ、１人で抱え込む必要は無いだろう？」
「え、あ、なんのことか分からないかな」
「明乃ちゃんはまだ子供だ、本来ならもっともっと大人に頼ってもいいんだ」
「・・・」
「・・・ ブルーマーメイドだって１人じゃ出来ないことは沢山あるだろう？それと同じだと思うぞ」
「え？」
「１人じゃ船は動かせないし、悪い海賊をとっちめる事もできないし救助活動も出来ない、１人だったらご飯だって作る暇もないだろう」
「・・・・・・」
「色んな人の助けがあって、初めてブルーマーメイドとして成り立つ。それは普段の生活にも言えることだと思うぞ」
「普段の生活・・・」
「そう、例えば今日明乃ちゃんがこっそり持ってきた宿題のノートとかね。分からない所があったんだろ？」
「ギクッ」
「やっぱりか、ほら見せてみろ。これでも頭はいい方だったんだぞ」
「え？そうなの？」
「おいなんだその顔は、これでも成績は良かったんだからな」

「疑わしい…」
「やっぱり教えるのやめようかな～」
「あ！嘘嘘！嘘だよ！いやーやっぱり春野お兄さんは頭良さそうだって思ってたんだよね！すごいや！」
俺ってそんなに頭悪そうか…？この間故障したレンジを軽く叩いて直そうとしたの見られたからかな？
まあなにはともあれ、明乃ちゃんが少しずつ他人を頼れるようになっていけばいいんだが…